

大分から参加 先生の声

言葉と身体が思考を育む

大会初日、作家の小川洋子さんによる記念講演。私にとって大好きな作家の一人である小川さんは、一つ一つの言葉を丁寧に選ぶように語っていました。

中でも、人間は肉体的であり五感に訴えるからこそ、言葉と身体の運動感覚、思考は密接につながっている、というお話には深く納得しました。

読んだり書いたりする行為は、目で文字を確認するだけで



田辺玲子校長

東中津中

なく、手や指を動かし、紙の感触や紙、インクなどのにおいを感じることを通して、文字と言葉から思考を育てていくこと一。

大会2日目の公開授業で、新聞をめくりながら紙面の文字を指でたどって読み、自分の意見を話し合ったり気付いたことを書き込んだりする小・中学生、高校生の姿を見て、そのことを改めて確認できました。

言葉と身体が思考を育むために、新聞が持っている役割を再認識したところです。

「いのちを守る」活動に感動

今年の全国大会は「いのちを守る」をテーマに展開された。戦後80年、阪神・淡路大震災から30年という節目の年だからこそ、過去の記憶を伝え、未来を創造する学習活動が求められている。

西宮市浜脇中（兵庫県）による2年社会科の公開授業は、SDGs（持続可能な開発目標）の一つ「住み続けられるまちづくりを」を目指し、主権者教育につながる活動だった。



永松芳恵校長

臼杵市南中

生徒たちはNIEノート（新聞スクラップ）を使って自ら選んだ記事を基に考えを記述し、全員が自分の考えをしっかりと伝え合う。教師の出番はほとんどない。授業の振り返りは生徒の言葉でまとめられ、地道な学習活動による想像力、思考力、表現力が育成されていると感じた。

「文学や新聞を読み、いろいろな人に出会い、他者を知ること、他者の命を慈しむ」。記念講演での作家小川洋子さんの言葉が生徒の姿と重なり、「いのちを守る」教育活動に感動し、考えさせられた2日間だった。

想像して文章書く大切さ

阪神・淡路大震災の発生から30年。全体会の会場ロビーには、震災発生当日から1年間の地域の歩みについて、神戸新聞社が保存する写真がカレンダー形式で展示されていた。

分科会では「防災はがき新聞」を作るワークショップに参加し、設定された震災の状況から、読み手に正しく伝わる「新聞」を作成した。言葉の向こうにいる「相手」を想像しながら文章を書いた。



渡辺容子教諭

佐伯南中

SNSの急激な普及により、人は自分のことを他者に伝えたがっている現状がある。しかし、SNSの画面はダイレクトに「言葉だけ」を伝えてしまう。だからこそ、受け取った側のことをどれだけ「想像」して書き込むことができるかが重要だ。

自分以外の他者への想像力や、それを表現する力は、人と人をつなぐ能力である。本や新聞などの活字を読むことを通して、読み手のことを考えながら「想像力」を働かせて文章を書く大切さを伝えていきたい。